

特集に当って

鳩山 由紀夫 (衆議院議員)

OR学会より「北海道開発のOR」を特集したいが、編集を引き受けていただけないかご依頼を頂戴したとき、私の心の中で正にそれはタイムリーであった。私は国会議員をさせていただいているが、現在も(有名無実の)OR学会員である。その遠因ははるか20年前にさかのぼる。当時大学生だった私に、大蔵省の役人の親父がこう言った。

「いまだかつて数学が世の中のために役に立ったことがあるのかね」

ショックだった。私どもから見れば、ジェット機が飛び、新幹線が通り、高速道路上をクルマが走るあらゆる光景が数学のおかげであるが、これはどうも常識ではないようだ。本四架橋の経済的評価などは8月号に詳しく述べられており興味深い。本四架橋の3ルートや、青函トンネルの隧道の広さなど、決定の経緯は工学よりむしろ政治が先行しているきらいがある。税金の無駄は極力抑えねばならない。行政、政治にたずさわる者は、いわゆる工学的マインドをもっとたねばならぬし、少なくとももっと評価してしかるべきである。そのためには両者が歩み寄る必要があり、ORは正にその橋渡しの学問でなければならない。そう考えていたときである。

さらに、北海道は現在、炭鉱、鉄鋼、造船、農林水産と、どれをとっても厳しい景気の波にさらされており、新たな発想で臨まねば地域は活性化されない局面をむかえている。今こそ科学の眼で北海道開発の芽を出し、育てなければならないのではないだろうか。

そう勇んではみたものの、私には「北海道開発のOR」というテーマは巨大に過ぎた。歴史的総括、農業、工業(2編)、サービス業、それに北方領土と担当を配分させていただいたが、それぞれが大テーマで、数ページの紙数では総論的にならざるを得ず、執筆には誠にご苦勞なことであったと思う。執筆をお願いしたのは、主として、ORの理論家と言うより、実際にそれぞれの立場から北海道の開発に従事しておられる方々である。したが

って、各論文とも示唆に富んでおり、個人的には非常に勉強になった。

まずお礼を申し上げたいのは、保革の枠を乗り越えて「トップの視点」に寄稿して下さった横路北海道知事である。当方の依頼を快く承諾して下さり、誰よりも早く玉稿をお送りくださったことに、心から感謝申し上げたい。以下簡単に各論文を紹介させていただく。

山崎氏の「北海道開発の歴史的選択」では、歴史的考察から、何が現在の北海道のコンセプトを作り上げているのかを指摘している。そして、北海道分県論では問題の解決にならないと結論づけている。佐藤氏の「農業地域社会の活性化」では、農業を核として産業コンプレックスの形成が北海道農業の将来に不可欠であるとし、その形成の手だてを産業組織論的に考察を加えている。田村氏の「技術連関分析による産業集積」では、産業集積のダイナミズムを北海道の地において起こすにはどうすべきか、システムハウスの例を挙げ、技術連関分析を行ない、フィールドテクノロジーにその可能性を与えている。中山道夫氏の「エネルギー産業からみた北海道の活性化」では、北海道の活性化は自然との共存の中で独自の生活様式を創造することにあると指摘し、そのための電気事業者の役割について述べている。また中山大二郎氏の「工業化時代の北海道経済と第3次産業」では、40年代の議論をベースに、就業人口の6割を占めている北海道の第3次産業に対して、過剰雇用や不経済だとする意見に反論を加え、一定の評価を与えるを試みている。最後の松原氏の「北方領土問題に対する基本的視角」では、北方領土問題を考えるさいの日ソの基本的関係を整理している。そして二島返還論は、ソ連が継統交渉をするならば、積極的に考える価値があると論じている。

いずれも個性のある論調であり、興味深い。数理モデルを割愛された方や、最新データで新たな考察を加えたいという方もおり、各論的な統編をそれぞれに期待している。